

Title	東洋哲學思想の基調
Sub Title	
Author	小柳, 司氣太(Oyanagi, Shigeta)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1931
Jtitle	哲學 No.8 (1931. 8) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000008-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000008-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 東洋哲學思想の基調

小柳司氣太

今日この講演にあたり、不圖思ひ出することは、莊子の書に於ける庖丁の逸話である。梁の君主文惠君が、その料理番なる庖丁に命じて、牛を解剖料理せしめた時、その手ぎはの如何にも鮮やかなことを嘆賞して「こんな巧みな技術が世の中にあらうとは、なんと驚いた事じや」と申しました。其の時に庖丁の答が、どうであるか、「私の多年心得した者は道であります、そは技術以上のものであります」と〔莊子内篇卷生主第三〕諸君。かく庖丁が道と技とを使ひわけしてをるが、此れが、抑も如何なる意味を持つものであらうか、私の所見によれば、そは正しく東洋の哲學思想と西洋のとの基調の相異を示す鮮明な一特徴であらうと思ふ。

諸君は、また宋の名將岳飛をば、御記憶のことゝ思ふ。總大將たる宗澤が岳飛に隊伍の組織や兵陣の圖形を傳授した時に、岳飛は元來左傳によりて古來からの戰

術を研究し、又孫吳の兵法に練熟したるにも拘はらず、宗澤のこの好意に對して「運用の妙は一心に存す」と申しました。〔宋史卷三六五〕諸君。此一心といふことこそ、また正しく東洋の哲學思想と西洋と異なるところの一基調であらうと思ふ。

東洋從來の學といふは、以上の道を修め心を養ふを其の最大目的としたもので、教と稱する者も、此の外にない。我輩の祖先は、皆な此の教學で訓育せられ、陶冶せられて來たのである。然るに明治以來、西洋の學術をとり入るや、此の傳統的の教學の精神は、無用陳腐のものと認められ、全然排斥せられてしまつた。すべて學問技藝といへば、西洋が主となつて、東洋は之が從屬たるに過ぎないこととなつた。恰も我國王朝時代に於て、學問といへば漢學で、五經三史を以て其の本體となし、文集といへば白氏文集を意味し、邦文で文章を綴ることは土佐日記に述べられた如く、婦女子の仕事で、男子のすべきことでないと思ふたことと同様な狀況となり、哲學と謂ふ時は「タアーレス」から以來の西洋哲學である、従つて東洋哲學といふ名稱は後に見はれ、倫理學といふ時は、西洋倫理學で「アリストテレス」を其の建設者と認む、其の實踐倫理の如きも、最初は歐米の修身書を用ひた程である。法律も同様で、

以前は帝國大學では、英獨佛の三科に分れて、それゝの國法を研究する状況である。醫術の如きは、全然西洋醫術の爲に奪はれてしまつて、漢方醫をば、國家が公認しないといふやうになり、其の他宗教でも美術でも、皆な同様な運命に陥つてしまつた。

然らば此等西洋の學術は基礎となり背景となる者は、何であるかといふに、理智的で論理的で、また經驗的であるといつてよろしからう。哲學といふ語の原義は、世人も知る如く「智識を愛する」または「智識を求む」といふことで「ソクラテース」以来いろいろの學派が興つたが、如何に吾人の智識慾を満足せしむるかを目的とした者である。そこでその所謂知識とは何ぞやといふ先決問題の解決に迫られ、認識論が哲學の中心問題となり、「カント」が其の管鍵を握るやうになつた。すでに理智的なれば、自ら論理に重きを置き、形式的の三段論法は、哲學の入門に必須な學問と認められ、更に「ヘーゲル」の如き論理即哲學を組織し、辨證法は思想の發展を説明し解決する最大有力の武器と認めらる。又自然科學は、事實と經驗とにより成立することと言ふ迄もなく、然かも自然科學の權威は、日に月に増加して、精神界までも風

靡せんとしてをる。萬物の靈長を以て自ら任ずる人類も、自然科學から見れば、孟子の所謂食色告子章進化論者の所謂自己生存と、種族保存とを本能とする肉塊に過ぎない。凡百の行動所作は、經濟的衝動と利己的の動機とに出でざるはないといふことになる。意識の活動も、是れまでは捕捉すべからざる者と見なされてをつたが、今や各種の機械を運用して、感情なり知識なりの測定をなすやうに發達して、心理學上に大なる革新を與へたことは、世人の知る所である。歴史もまた同様で、神話學、土俗學、民俗學などの發達から自然科學的に之を取り扱ふこととなり、吾人が從來遵奉して敢て犯すことの出來ない者と認めたる各種の儀禮習慣風俗なども、其の起源を探り由來を究むるときは、迷信恐怖排他軋轢といふやうなあらゆる不道德、否な野蠻時代の無道徳から發展した者に過ぎない、——かく大悟徹底(?)して見れば、格別尊敬するに足らない、隨つて道徳は強者の權利にして、宗教は阿片である。奈良の東大寺は、人民の膏血を絞ばつたものであるといふやうな、奇想天外より落つるところの結論を生ずることになつた。

之を要するに西洋の學術は、冷靜な理性で、眞理を探究することを第一の必要條

件となす。されば數學は Exact science と呼ばれて、科學の中に最も正確なものと稱せらるゝは、其の性質上、些少の感情も意志も働くことを許さず、純然たる推理力の範疇に屬するからである。自然科學は皆な之と同様で、唯だ事實を、そのあるがままに取り扱ふだけで、そこが學術の學術たる所以である。故に之に遠ざかれば遠ざかるほど、非學術的と稱せらる。故に單に學術といふ時は、哲學でも文學でも、皆な此の中に網羅せられてをるやうに考へらるゝが、其の實際は、寧ろ自然科學の專稱である。例すれば今回の帝國議會に於て、貴衆兩院を通じて、學術振興の建議が通過したことを諸君は御記憶の事と存じます。ところで其の學術と稱する者は、主として物理學化學といふやうな自然科學であつて、哲學また文藝の如き精神界には、餘り重きをおいてない。何となれば哲學又文藝の如き精神界に關する事項は、固よりある程度まで、自然科學の原則で推し窮はめらるゝが、唯だそれだけでは不十分である。換言すれば Science また Wissenschaft 本來の語意とピッタリ一致せずして、自然科學の範圍を超越してをる傾向があるためであらう。萬國學術會議などの學術といふ語も、また此のやうに思はる。然しながら此超越の垣根も何時かは

自然科學の進歩によりて、打ち破られてしまふ、例へば雷電の如きは、以前は雷神の所爲にして、人力以上の活動も認められたるも、現代は電力であること明白となつたやうなもので、哲學は傲然 *Science of Sciences* と威ばつても、物理化學其他の自然科學のために、朝に一城を取られ、夕に一城を陥れられて、終に何等の領土をも所有すること能はざるの恐れがないではない。

科學者の眞理、それが果して人生生活の全局を網羅したる者なるか。是れは大なる疑問である。何となれば吾人の意識また所作は、單に理性だけではなくて感情もあり意志もある。一體宇宙間のあらゆる事實は、その存在の理由から言ふ時は、善もなく惡もなく、美もなく醜もない、ツマリ價値のないものである。引力の理法又「エネルギー」の不滅は、善でもなく惡でもなく、又飢ゑては食を欲し、渴しては飲を欲することが、美でもなく醜でもない、其他詐偽強盜殺人の如きも、また孝悌忠信の如きも、其の間に何等の區別がない、唯だそれだけの事實である。科學的研究はその事實を的確に發見して、何故に又何所に詐偽強盜殺人が行はれ、孝悌忠信が生じたかを知ればよろしいので、詐偽強盜殺人が惡であり孝悌忠信が善であるかを

決定する力又職能はないわけである。又是等事實研究の結果、如何なる結論が見られやうとも、そは全然無關心であらねばならぬ。詐偽強盜殺人こそ人類の幸福で、孝悌忠信は寧ろ至善であるかもしけない、さうなつてもそは事實であるなら、科學者を責めるわけにはゆかない。例すれば科學者が、實驗室で、毒瓦斯の發明に成功するやうなもので、毒瓦斯そのものは、善惡美醜の價値と全然範圍を異にする者であるが、その發明は眞理たるに於て一毫の缺陷はない筈である。且又眞理も、皆平等でそれゝ獨立性を有し、優劣尊卑の差別なきこと、是れまた自明の理である。されば螢のお尻がどうして光るかを研究することも太陽の本體を研究することも同一で、獸醫決して人醫に劣らざること明かである。隨つて研究方法もまた分科的専門的となればなる程、科學的と稱せらるゝわけで、假令へば一箇の時計を作る時に「ゼンマイ」は「ゼンマイ」、指針は指針、外側は外側といふ風に、幾種類の職工の手を経て製造せられ、それが組み立てられるれば、時計が出来るといふ風に考へたものである。人生また文化も此の方法で研究するわけなれば、自ら一箇人の意識活動は智情意に三分せらるゝだけで、全人といふ者がなくなり、人生も、またそれぞ

れの部分に區別せられ、其の區別に應じて科學的眞理が獨裁權を有する譯だから、統一又は調和の思想は求めんとするも得べからず。例へば社會問題の如きは、その的例である。經濟學の眞理と倫理學の眞理とが、衝突しお互に排斥することから、起つたものに相違ない。

之を要するに自然科學が、西洋學術の太宗師である。哲學は價値を決し、規範を與ふることに於て、自然科學と異なることを論するも、哲學その者の目的なり方法なりは、どこまでも、純理に根ざして、論理的に組織せられてをる。私は哲學の専門家に非ず、隨つて近時歐米の思想界が、如何に動いてをるかを十分に承知せず、或は「オイケン」の理想主義「ペルグソン」の直觀說など、從來と多少色彩を異にするやに傳聞してをるが、——然しながら大體は自然科學であると思ふ。かの燎原の火の如く人心を煽動する「マルクス」一派も、また此の大潮流に航行する戰闘艦である。自然科學の標榜する眞理から觀じ來れば、人生は箇別の集團で、恰も $n+1=4$ といふ如きものに過ぎない、荒涼たる賽の河原に積みかさねられた石塔に過ぎない、人間それ自身も亦時計の如く「ロボット」の如きものと格別の差異はない、かくては餘り

に殺風景である、無趣味であるといふことから、歐米では、基督教で其の缺陷を充たし補ふことゝなるが、其の基督教は、近世に至つて學術の公敵と認められ、信教自由の美名の下に、教育から分離せられてしまつた。且つ基督教自身が排他性を帶んでをることから、博愛また一視同仁を主張するも、それは白人間だけに行はるゝ格言で、世界のあらゆる人類を通じて、法悅の慈雨に潤澤せしむることが出来ない。或は如此き事が基督教のまことの主旨でなくて、白人種が政略的に之を利用したこともあらう。由來白人種の文明は、軋轢爭鬭から生じたもので、それは希臘の歴史でも、羅馬の歴史でも、みな之を證明してをる。各都市の争、貴族と平民との争、ケルト、ゴーレ、ラテン、チユートン、其他東方から來たトルコなど各人種の争。それが自然地理から言へば亞細亞大陸の半島に過ぎざる猫額の地に、幾回も幾回も繰返されたことである。〔歐洲全般は六十萬方里あるも、其の中、三十餘萬方里は露國の領土で、それが歐那本部即ち八省に均し〕 加之に産業革命以來、人口と物資とは益す比例を失しぐづくしてをると皆な乾ばしになつてしまふ。そこで彼等は、一面には黃色人種排斥をなしながら、自分はのこくと亞細亞大陸まで出かけてきたわけで、現代の大問題は、之を如

何に處置すべきかである。然かも此れが唯だ政治上又外交上の問題だけではない、宗教哲學其他一切の人類文化史の最大なる疑問である。然らば東洋哲學思潮の本質、はた基調は何であるか。私は前に述べた庖丁の所謂道であり、岳飛の所謂心であると思ふ。實在論から言へば道であり、觀念論から言へば心であると思ふ。——私は西洋哲學の用語を十分に知らないため、或はかく用ふることが誤りであるかもしれません、——而して道も心も混成して一となることが、本邦支那印度を通じて行はれた人生觀世界觀であると思ふ。されば先づ道といふことについて、少く鄙見の在る所を述べん。

道の原義は、道路で、國語の「ミチ」の「チ」は路、「ミ」は接頭語である。漢字の道も行路で、爾雅漢字の訓詁に關すの釋宮篇にも、「達謂之道」とありて、甲所から乙所に達する一本筋の路である。そこで此の道路の性質また職能を案ずるに、第一、關係を示す。前述の如く甲乙兩地の距離を關係づけるものは道路である。第二、條理を示す。道路は旅行者にとりては目的地に達する一定の方指向を指すもので、もし之に違ふときは迷子となる。第三、公共的である。道路は獨占を許さない、又除外例をも認

めない上は王公貴人より下は匹夫匹婦に至るまでも、否な犬でも猫でも、あらゆる者は、大手を振つてそこを通行して差支ない、またある特別の階級が、或は権力により、或は富の力によりて、通行以外の道路を求むる場合がないではない。然しながら結局は、無効に終るものである。第四歴史的である。道路は何人が之を開いたといふわけはない、必要上、自然に出来上つたもので、最初ある一人があるき出し、それから二人となり、三人となりて、後には無數の人人が通行するやうになつた。されば、その始めは草や荆に埋められ、石や穴で凸凹だらけのものなるが、後には平坦なものとなつたものである。第五、實行的である。前條に述べた次第なれば、如何に美くしい道路が通じても、實際に通行しなければ、有名無實のものとなり、隨つて道路そのものも、再び原始的の状態に退化して、茫茫たる原野となつてしまふ。以上は私が道路に對する感想であるが、東洋哲學思想の基調たる道も、また此の如きものであると思ふ。

有物有則〔物あれば則ありと訓ず、詩經大雅常民〕すべて事物の存在する所には、必ず法則なかるべからず。今天體を仰げば如何、十萬餘里の距離ある月も、數十光年を經

過しなければ見ることの出來ない星も、其の運行には一定不變の軌道を循環して、一絲も素れずにをるではないか。又此の地層を縱斷して、之を研究せむか。太古時代の片麻岩紀 Genesis period から新生代の冲積世 Alluvial Era まで、水火の作用によりて積みかさねられ、之に順應して、各種の動植物が、生長し棲息した事實と過程とが歴々として證明せらるゝではないか。而して此地球は固より太陽系の一天體で、引力の理法によりて支配せられ、その太陽系もまた他の太陽系と離るゝこと能はざる關係をもつてをる。要するに宇宙〔淮南子齊俗訓に往古來今謂之宙、四方上下謂之宇、之字とされば現代の時間と空間とを意味す〕は理法即ち道の活動で維持せらるゝ一つの渾圓體である。萬物の間には必ず一定の關係が成立してをるもので、彼に満つれば此に缺け、此に擊ては彼に應ず、剝復乗除は、宇宙の大なる算盤であることを知らなければならぬ。しかも此の渾圓體は死物でなくて活物である、故に我地球も、あらゆる天體も、決して永遠不變ではない、斷えず變遷してゆく、蘇東坡の赤壁賦に「自其變者而觀之」とあり、又程伊川の説に「天下ノ理、終リテ復始マル、恒ニシテ窮ラザル所以ナリ、恆ハ一定ノ謂ニ非ルナリ、一定ナルトキハ恆ナルコト能

ハズ、唯ダ時ニ隨ツテ變易スルハ、乃チ常道ナリ、天地常久ノ道、天地常久ノ理、道ヲ知ル者ニ非ズンバ、孰カ能ク之ヲ知ラン。〔伊川易傳 恒卦及び近思錄卷一 道體類〕かく論じ來れば、恒久と變化並び行はれて悖らないことが、宇宙に於ける永遠不變の大道である。又關係である。故に我地球は太陽の周圍を巡行する八大遊星の一つで、太陽から言へば水星、金星、地球、火星、土星、天王星、海王星となり、其外に無數の天體が、それゝゝの位置を占めてをるが、此等の位置が顛倒し——地球が水星といれかはりをなすといふやうな事は、決して起り得ない、即絶對に整然たる秩序が行はれてをる、之が天文と稱せらるゝ所以である。文の本義は「入りまじる」といふことで、二すぢのもの例すれば青と赤との二色が、×形に組合はされた形象を示す、隨つて「カザル」といふ意味になり、文飾文彩文理などゝいふ熟語も出來た。〔段玉裁說文解字註九上〕天象は前述の如く日月星辰の軌道が、蜘蛛の網のやうに×形に組合されてをるから、天文と稱したもので、地理といひ地文といふの意味も、亦同様である。

更に之を人事に徵するに、道德は正しくそれに該當する者にして、道德は人と人との關係を規定する理法即道である。天 上界に無數の星辰が羅列して、それゝ

の軌道を巡行する如く、人界には、男女老幼君主父子等、雜然混然として生息し、千差萬別の行動をなすが、其間に於て、自ら一定不變の關係が結びつけられて、社會を組織し、國家を形成す。孔子の「君ハ君タリ、臣ハ臣タリ、父ハ父タリ、子ハ子タリ」〔論語顕第十四〕とは、此の謂にして、また之を人倫ともいひ、其の大なる者を君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫といふ〔孟子滕文公上〕倫とは物事の組み合はせでタグヒ(輩)ナラブ(比)など、いふ意味あり、前述の文といふ語の原義と同様で、道徳は甲乙の組合から生れた者なれば、此の語を用ゐたものである。かく社會組織の各分子が、各々其所を得、整然たる秩序あるを人文といひ、有道の時代といふ。それが具體的となつて實現した者が、制度典章にして、儒教の用語によれば禮樂である、易經の賁卦の彖傳に觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下と故に東洋に於ける文化の真正なる意味は、正しく此れであつて、決して「バラツク」式の「ベンキ」塗りの建築物や、モガ、モボ式の輕佻な異裝耳を聾する計りの「ジャズ」ではない。

かく道徳は人人の關係を規定する秩序なれば、人人の位置境遇によりて、自ら貴踐尊卑の差別を生ぜざるを得ない。然しながら其の貴踐尊卑の差別は、社會組織

の都合上、便宜上、自ら與へられたる者で、物それ自身としては、如此き差別あるべき  
わけはない。社會は有機的で、之を人體に譬ふれば、耳目鼻口の如く頭部にある者  
もあり、又股や脛の如く肛門尿道の如く下部にある者もある、此等の機關が各々其  
の職能を盡し相助け相救ふて、始めて健全なることを得若し上下の器官頭足の區  
別もなく、渾沌たる「クラグ」の漂へる如き者ならば、人體と稱することが出來ない。  
故に人體から言ふときは、上下頭足の位置によりて、貴踐尊卑の別を見るわけがな  
い。治者となり、被治者となり、親子兄弟となるも、また此の如き者でなからうか。

されば其の基礎また根柢から言ふときは、此等の差別は相背反する者に非ずして、  
寧ろ兩立して調和すべき者でなければならぬ。例へば甲と非甲とは相反するこ  
と明かなるも、甲ありての非甲、また非甲ありての甲にして、甲なくんば非甲もなく  
非甲なくんば甲もあらず。之を具體的事實に證せんか、資本家と労働者とは、全  
然相背反するも、資本家ありての労働者、労働者ありての資本家でもし天下を擧げ  
て、盡く資本家となり、或は盡く労働者となることは、資本も労働も、寧ろ二つながら  
亡滅するの時であるまいか。要するに差別と平等とは並び行はれて悖らないこ

と、恰も變化と恆久と、並び存する如きものである。

易經の說卦傳第一章に曰く、立天之道曰仁與義。立地之道曰柔與剛。立人之道曰仁與義と、道は天地人を一貫し混成する者で、宇宙も人生も、秩序また調和の實現である。されば道德は人爲に非ずして天地の公理に本づき、社會組織の必要上、自づと見はれたもので、そは儒教の理想たる仁の字義で明かに知らる。仁とは二人といふ文字を結びつけたもので、道德の出發點でもあり終局點でもある。また道は實證的のもので、懸空に存在する者ではない。所謂「物アレバ則アリ」で、事物を離れて、別に抽象的の道あることなし、故に儒教の道も、宋に至りてこそ、心法の意味あるも、其の始めは事實に即したるものにして、孔子の所謂誰能出不由戶。何莫由斯道也〔論語第六篇第六章〕孟子の所謂道如大路然〔告子上〕である、されば漢代の學者孔安國は、道禮樂也〔論語陽貨篇第十章〕といふ。また老子の無名の道は、一見すれば抽象的に見はあるも、そは唯だ否定の論理から立證したる發表である、故に曰く道常無爲而無不爲〔老子第十七章〕佛教の萬法是眞如。眞如是萬法〔淨名經〕も、また同く諸法即實相にして、灰身滅智だけでは、まだ妙諦を體得したる者でない。されば老子の虛無、佛說の清淨も、

其の實は事實に立脚したる思想である。我國民性は、最も理論を好まず、言説を賤む。故に本居翁の説によれば「古への大御世には道といふ言葉もさらになかりき。そばたゝ物にゆく道こそありたけれ。……實は道あるが故に道てふ言なく、道てふことなけれど道ありしなり」〔直昆〕また曰く、「心を祓ひ清むと云は、外國の意にして御國の古さらにさることなし」〔古事記傳六の卷〕また道は實踐躬行を必要條件となす、唯だ道を知るだけでは、眞の知ではない、之を實行しなければならぬ。是點が、西洋學問の目的たる眞理と大にちがふ所で、眞理は明確なる概念や論理から出來上がつたもので、即ち理性の所産物なるが、道は必ず感情及び意志の活動にまたなければならぬ。故に西洋の或る學者の所説には、單に知ることを以て倫理學の目的とするも、東洋の倫理は決して然らず、どこまでも其の實踐躬行を要求す、坐して言ふべく立てつて行ふべくして、始めて眞知又實學と稱することを得。故に教學は全人格の完成にして、道は知行の統體である。されば道はまた宗教の要素を有し、色彩を帶び、人生識字憂患始〔蘇東坡詩句〕といふ如く、純理研究の哲學は、懷疑と不安心とを増す者で、安心立命の境地を與ふることはできないが、唯だ宗教的思想は、此の缺陷を補ふこ

とを得。儒教は徳教にして宗教に非れど、孔子の思想は、天を敬し神を畏むの信念あり、故に祭には如在の誠〔論語八佾〕を致し、鬼神の德たるそれ盛なるかなといふ〔庸中〕抑も其の終りを慎み遠を追ふの誠意〔論語學而〕溢れて三年の喪忌ともなり、五服の儀文ともなる。此等の儀式は、一面から見れば皆な宗教的要素を含んだものである。而して儒教は支那の國民道德なれば此等の儀式は單に儒教の専門學者間だけに行はれたものでなく、國民全般にゆきわたつたものである。換言すれば、徳教と宗教とが調和せられてゐる。我國の如きも亦た同様で、固有の道——現代から言へば、神道は祭政一致から出發したもので、國民道德であり、國民の宗教的意識の發露にして、即ち政教一致である。佛教は宗教なるが其の道德的因素は、神儒と格別の相違なく、王法佛法並び行はれ、眞俗二諦の融合を見る。而して此の神儒佛三教は皆な實行體驗を重んず、神道は前述の如く我國民性から見はれたものなれば「言あげせぬ國」〔萬葉集卷十三〕といふ程である。儒の實行を重んずることは、言ふまでもなく、佛教また戒定慧の三學兼ね備はらざれば、名僧知識と稱しがたし。隨つて此等の三教を通じて、行と稱する修業が行るゝやうになつた。神道には鎮魂歸魂、ま

た御禊の儀式、儒教には文武兩道靜坐體認、佛教には坐禪觀心といふ風に——固より末流に至つては、形式に墮し、迷信に捕はるゝ傾向もあるが——これ皆な物心一如といふ思想から起つたもので、我等の祖先は、如此き教育によりて、訓練せられたものである。現代の教育を以て自ら任する者は、先づ此の點を忘れてはならぬ。

西洋輸入の哲學科學が目的とする眞理と、東洋學術の目的とする道との差違は、以上の略述で、諸君も多少諒解せらるゝことならんか。西洋から見れば宇宙は天地人ばらくになつて、各々絶對的平等的地位をとり、何等の關係もないが、東洋からすれば、之に反して宇宙は秩序ある渾圓體となる。西洋から見れば、人の意識活動は理性の偏重なるが、東洋から見れば情意の満足をも包含する。西洋から見れば、人生は競争奮闘の修羅場なるが、東洋から言へば長閑な春風の吹きわたる調和の樂園である。西洋から見れば事物の起源經過は明かに知らるゝが、東洋からすれば、理想その者を直觀す。西洋からすれば教學分離なるが、東洋からすれば其の一一致となる。かく論じ來れば、東洋は道の國にして、神儒佛は皆な普遍的大道が、時處位に應じて、各國各時代に見はれた教相である。故に神道、佛道、儒道といふ

如く道といふ文字で一貫してゆく。其他諸子百家、皆な道ならざるなく、百工技藝、皆な道によりて始めて其の蘊奥に達す否な瓦礫草木に至るまでも、道に漏るゝことなし、故に莊子曰く、道在尿溺〔外篇 知〕

人或は曰はん、貴説の如く、道といふものが客観的に儼存して、吾人が之に服従遵奉することならば、其の道徳は、他律的であつて、自由意志から起つたものではない、かくては道徳の本質と相違するに非るかと。吾答へて曰く、人壽永きも百歲、人體大なるも五六尺、これを無限の時間と無限の空間に比すれば、滄海の一滴にも及ばず。然るに天地に參して、三才の一となり、渾圓體となる所以の者は、心あるによる。此の心は何れより來りたるものか、孔子曰く、操則存。舍則亡。出入無時。莫知其嚮。惟心之謂與〔孟子告子篇上〕と、詮じつむれば宇宙の實在たる道の人身に寓したる者に外ならず、故に中庸に天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教と。蓋し道は前述の如く、天空に輝きわたる日星より、野に咲く一片の花に至るまで、その實現でないものはない、其分れた點から見れば、萬物な皆その固有の道を有して、絶對獨立なるが、其統一したる點から見れば、何れの萬物も、相互の間に包含容攝せらる、佛説で之を

因陀羅網といふ〔華嚴經十玄〕天地即大自然も我とは一體不二の關係、天地なれば、我も生を兩間に享くる能はず、我なれば、天地もこれなきに均し。天地即大自然は自らを創造す、易に曰く天地之大德曰生と。衆理を具へて萬事に應ずるは心の靈妙なるはたらきにして是れまた自己創造である。故に道德の極致は此大自然と我とが一體となることで、仁者以天地萬物爲一體〔程明道の語〕といひ、三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。是三無差別〔華嚴經の所說〕といふ。是の思想は、宗教の上に見はれて、神人同格教となる、故に神道は神人同體、佛教は即心成佛をその理想となし、徳教たる儒教は聖人となることである。周濂溪曰く、聖希天。賢希望。士希賢と程伊川もまた曰く學以至聖人之道也〔近思錄卷二〕故に天下の人人を擧げて、神とならば神國であり、天下の人人を擧げて、佛とならば佛國であり、天下の人人を擧げて、聖人とならば聖國である、神國、佛國、聖國は必しも夢幻の如き「ユートピア」ではなくて、現世界そのままが、かくなるべき理想をもつてゐる。此の理想は心の自己創造が見はれたものである。然らば道徳は客觀的に實在するのみならず、主觀的にも亦實在す、之を遵守することは他律的に非ずして、自律的で、自由意志であること疑

ふべからず。大なる哉、心のはたらき。誰か汝を抑制する者ぞ。是を以て古の哲人は、意を此に用ゐないものはない、或は存心、養心、求心〔子の語〕といひ、或は過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得〔金剛經の句、碧巖集第4則評唱にも見ゆ〕といふ。然しながら孟子の存心説も、金剛經の心不可得説も、唯だ一場の漫言に非ずして、多年實地參究の結果なることを知らなければならぬ。さらばいかに參究すべきか、孔子曰學而不思則罔。思而不學則殆〔論語爲政篇第二〕と、道元禪師曰、この法は人人の分上に、ゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、證せざるにことうることなし〔正眼藏辨道話〕と、學修思證の二法は、實に道を究め心を知るの入門である。

以上の敍述によりて諸君は、始めて庖丁が技に満足せずして所好者道也進乎技矣といひ、岳飛が運用之妙在於一心といふことの意味を領會せしならんか。すべてあらゆる藝術、書畫を始めとして三味線、お琴に至るまで、苟くも其の蘊奥を極め名人と稱せらるゝには、こは單に手先きのわざでなくて、入神の技である、入神とは、道と心との一致したる境地にして、學問また然り。之を要するに東洋思想に於ける學問の目的は、道であり心であり、抑も亦自證智の修養である。

今や我國の文運隆盛、大學は官私を通じて十數の多きに上り、之に從學するもの數萬人の衆きに達す。若し彼等に向つて「學問の目的は、道を求める心を養ふに在り程伊川の所謂聖人となるに在り」といはゞ、或るもののは此の意味を了解すること能はず、或る者は事情に迂闊なりと冷笑せん。是れが現在教育と學問との大勢にして自然科學の流行の然らしむる所——我國が此の自然科學を輸入して、大なる利益を得たることは、固より明なるが、また一面には、東洋思想に於ける學問の本義をば、弊履の如く棄て去りたる結果、教學の分離を來し、倫理學愈盛んにして、節義益す振はず、宗教學愈發達して、宗教家容易に得がたく、教育學愈究はめられて、師弟の間は資本家對勞働者の如く、學校騷動跡を絶たず。是れ抑も何によりて然るか、我國の教育は、英國人を造るに非ず、米國人を造るに非ずして、我國人を造ることなれば、此の東洋哲學思想の基調を回顧して、之が根柢を培養しなければならぬ〔昭和五年十一月三日開講演會〕

なほ左の拙論参考。

(1) 道學と哲學〔昭和三年八月一日發行 哲學雜誌第四三卷四九八號〕

哲 學

- (2) 東洋に於ける教育の根本義〔倫理講演集第三三八號西  
昭和五年十二月發行丁〕
- (3) 東洋哲學概論〔春秋社發行大思想エンサ  
イクロペヂア哲學部門〕